中山間地域総合整備事業「とやま西部丘陵地区」
圃場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

富山県福岡町

沢川地区に係る埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告書

TH－01遺跡・TH－02遺跡・沢川ヌゲダ遺跡・TH－04遺跡・沢川北遺跡

2001年３月
福岡町教育委員会

カラー図版 1　　気屋式土器（1/2）

カラー図版 2　　調査対象地航空写真

カラー図版３　　TH−01・02、沢川ヌゲダ遺跡全景写真（北西から）

カラー図版4　　沢川ヌゲダ遺跡全景写真（南東から）

カラー図版５　　沢川北遺跡全景写真（北から）

カラー図版６　　TH－04遺跡全景写真（東から）

序

福岡町沢川地区で計画されている圃場整備事業は、中山間地域総合整備事業「とやま西部丘陵地区」に伴うものです。

福岡町教育委員会では、この事業の実施に先立ち分布調査・試掘調査を２ヵ年にわたって実施してまいりました。

調査の結果、新たに縄文時代中期～後期を存続時期とする沢川ヌゲダ遺跡が確認されました。出土遺物は、富山県・石川県を分布地域とする気屋式土器が主体を占めるものでした。また、これまで沢川北遺跡として周知化されていた場所では、縄文時代中期中葉の古府式土器を主体とする遺物包含層が確認されました。こうした成果は、沢川集落の生い立ちを考える上でも貴重な「史料」となるものです。

本書が、地域の歴史を理解する一助となり、埋蔵文化財保護意識の向上に資することが出来れば幸いです。

最後に調査に御協力を頂きました地元の方々、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成13年３月

福岡町教育委員会

教育長　石田　伸也

例　言

1　本書は、富山県西砺波郡福岡町沢川地区における埋蔵文化財包蔵地の試掘調査報告書である。

2　調査は、中山間地域総合整備事業「とやま西部丘陵地区」圃場整備工事の実施に先立ち、富山県農地林務部高岡農地林務事務所の依頼を受けて、福岡町教育委員会が実施した。

3　調査の実施にあたって、富山県埋蔵文化財センターの協力と指導を得た。また、調査費用は、福岡町教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。

4　調査事務局は、福岡町教育委員会生涯学習課におき、文化財保護主事栗山雅夫が調査事務を担当し、教育次長川原清勝が総括した。

5　分布調査・試掘調査の期間・面積・担当者については、第１表・第２表を参照されたい。

6　本書の編集と執筆は、福岡町教育委員会文化財保護主事栗山雅夫が行なった。

7　発掘調査・整理作業・報告書作成にあたって、下記の参加を得た。

高田優子・増山真由美

8　出土遺物及び記録資料は、福岡町教育委員会が保管している。

9　調査の実施にあたり、以下の方々から御教示と御協力を頂いた。記して謝意を表します。

山本正敏・宮田進一・岡本淳一郎・島田修一・高梨清志

富山県高岡農地林務事務所・沢川自治会・福岡町シルバー人材センター

10　その他

（1）トレンチ番号は～Tとした。

（2）遺物番号は、写真図版と実測図をリンクさせている。

（3）方位は真北、水平基準は海抜高である。

目　次

序文

例言

目次

第１章　遺跡の立地と歴史的環境 …… 1

第１節　沢川地区の位置と地形 …… 1

第２節　歴史的環境と周辺の遺跡 …… 2

第２章　調査に至る経緯 …… 3

第３章 調査概要 …… 4

第１節　分布調査 …… 4

第２節 試掘調査 …… 4

1　試掘調査の経過 …… 4

2　ＴＨ－01遺跡 …… 6

3　ＴＨ－02遺跡 …… 7

4　沢川ヌゲダ遺跡 …… 7

（旧ＴＨ－03遺跡）

5　ＴＨ－04遺跡 …… 9

6　沢川北遺跡 …… 10

第４章　まとめ …… 11

参考文献

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第１図　地形と周辺の遺跡

第２図　分布調査対象地

第３図　分布調査結果と試掘調査対象地

第４図　試掘調査終了後の遺跡分布図

第５～９図　試掘調査概要図

第10～13図　遺物実測図

表目次

第１表　分布調査内容一覧

第２表　試掘調査内容一覧

第３表　試掘調査終了後の遺跡総括表

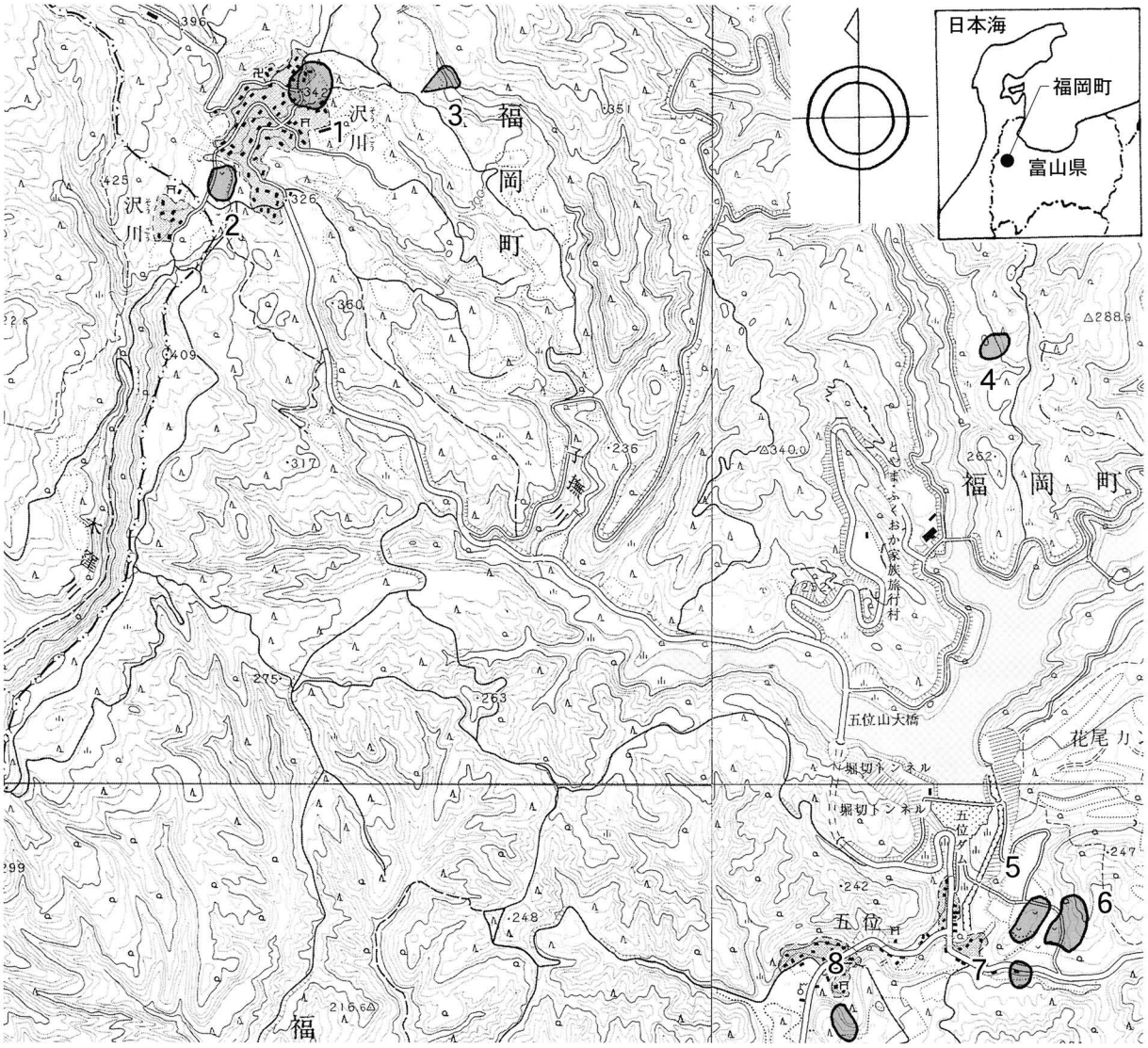
第１章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　沢川地区の位置と地形

福岡町は、富山県西部の「呉西」と呼ばれる地域の西端に位置する。町域は南東の平野部と北西の丘陵部に二分され、この境界付近を小矢部川が流れる。平野部は砺波平野の北西端部にあたり、小矢部川と庄川によって形成される複合扇状地の扇端部である。丘陵部は、町総面積の３／４を占め、宝達山を主峰に能登半島に連なっている。

調査を行なった沢川地区は、町の丘陵部中で最北西に位置する集落で、北と西は石川県押水町に接し、東は氷見市に接している。集落は、標高330m～350m付近に立地し、周囲を山地が囲むようにして形成される。ただ、東方向は視界が開かれており、天気の良い日は立山連峰を望むことができる。

調査対象地の地形は、大谷川・北谷川・名古谷川によって侵食谷が３本形成されており、遺跡はそれぞれの谷に挟まれた尾根上の平坦地に広がっている。



第１図　地形と周辺の遺跡（1/25,000）　1.沢川北遺跡　2.沢川南遺跡　3.沢川ヌゲダ遺跡　4.五位遺跡
5.五位小丸山遺跡　6.五位陣取山遺跡　7.五位東遺跡　8.五位南遺跡

第２節　歴史的環境と周辺の遺跡

１．歴史的環境

沢川の地名由来は、川が多く流れ水量が豊富であるためだとされている。『福岡町史』によれば、旧集落は近世初頭に発生した地すべり災害に被災し、現集落の場所に移転したと伝承されていることが記されている。旧集落が存在したとされる水田には、蔵屋敷田・ごぼ田・おかね田の小字が残されており、集落移転を裏付けている。

また、沢川集落の成立と展開については、次のような伝承や記録が残されている。

①「七軒百姓」の話

治承元年（1177）の鹿ケ谷事件により鬼界ヶ島に配流された俊寛が、越中宮島峡（小矢部市）に匿われた。その時、八右衛門・七蔵・孫蔵・勘五郎・長次郎・九蔵・勘九郎と呼ばれる７人の従者も俊寛を慕っていっしょについてきた。そして、彼らが百姓となり、沢川を開拓したという伝承。

②光永寺の開基

沢川唯一の寺院である光永寺は、寺に残る伝承では、当初、木曾義仲の系統の武士が開いた真言宗寺院と伝え、蓮如が北陸に進出するのに呼応して浄土真宗に改宗したとされている。本願寺の記録によると、元和10年（1624）に寺号が下付されている。また、『加越能三州地理志稿』によると、光永寺について「其初不詳慶長十年（1605）僧宗知再興」の記録があり、近世段階までその存在を追うことができる。開基伝承が事実ならば、12世紀末～13世紀にかけて集落が展開したことになる。

③田畑兵衛の道案内

天正12年（1584）佐々成政が前田利家方の城である末森城を攻めた際、宝達山麓の山林を所領としていた田畑兵衛が成政軍の道案内を行っている。この時、兵衛はわざと成政の軍勢に山中を彷徨わせ、前田方を勝利へと導いた。この功績により、前田利家からそれまでの所領を安堵され、代々加賀藩の御扶持人山廻役に任命された。中世末期には沢川集落がムラとしてまとまりをもつ規模になっていたものと考えられる。

④検　地

慶長10年（1605）沢川村の検地が行われている。

⑤砺波郡家数調

元和5年（1619）の砺波郡家数調によると沢川村は赤丸組下として17軒を数えている。

⑥沢川村戸数及び人口

天明5年（1785）の記録では、百姓55軒・頭振１軒・光永寺１軒の57軒、住民は290人を数えている。この軒数は、元和5年当時に比べ3倍以上を数えており、集落の発展を読み取れる。

２．周辺の遺跡

沢川地区には、これまで沢川北遺跡（散布地：縄文中期）と沢川南遺跡（散布地：時期不明）の２遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として確認されていた。また、当地区から約３．５ｋｍ南東に位置する五位地区や約５．０ｋｍ南東に位置する小野地区には、旧石器時代・縄文時代の遺跡が点在している。こうした遺跡の分布状況を考慮すると、沢川にも未確認の遺跡が存在している可能性は高い。

第２章　調査に至る経緯

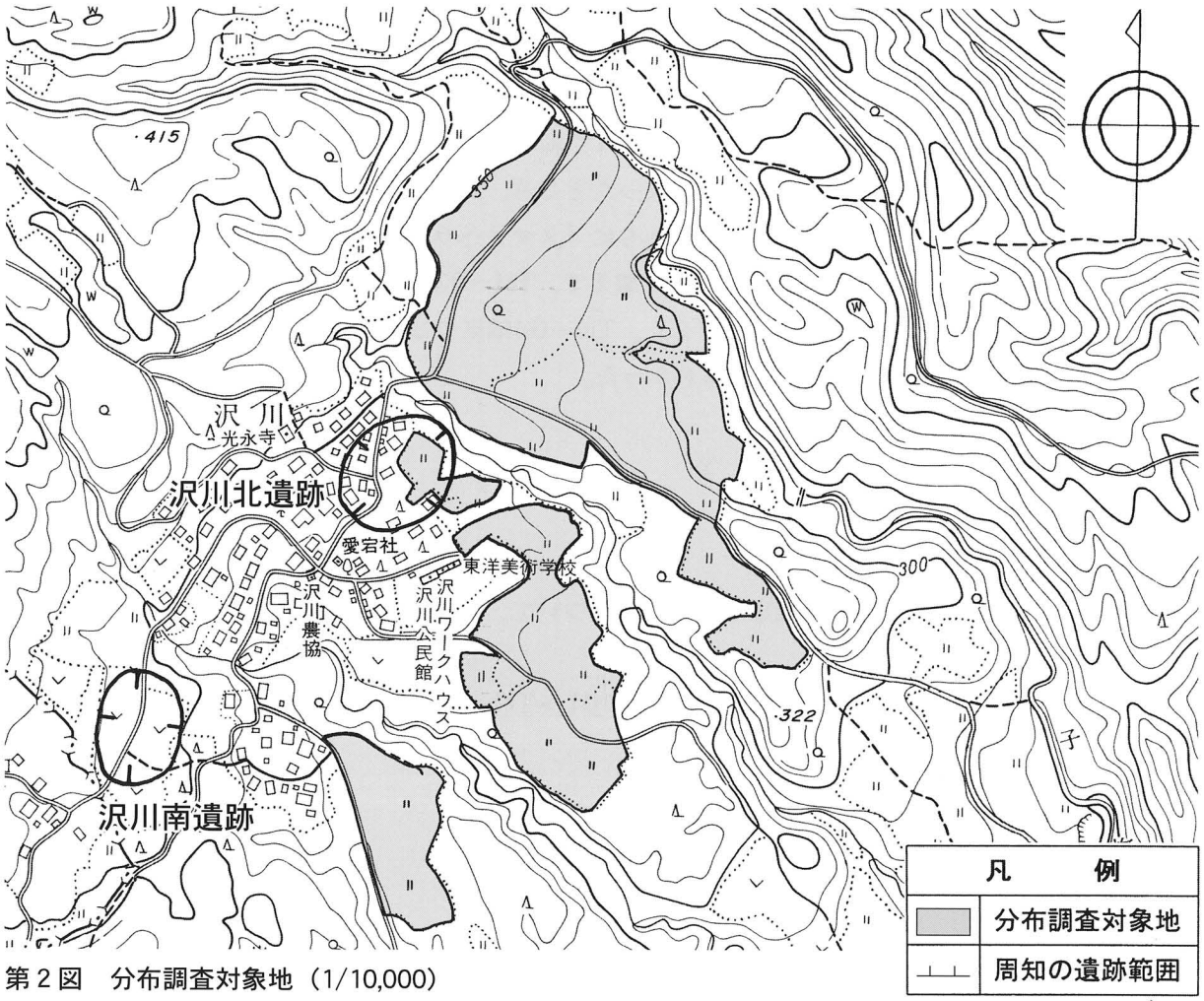
平成10年４月、福岡町中山間地域活性化プランが策定された。この中で、沢川地区は集約農業地域に区分され、農地荒廃の歯止めと作業性の向上を目的として圃場整備を行うことが計画された。

平成10年10月「とやま西部丘陵地区」圃場整備工事打合せ会が開発関係部局で行われ、埋蔵文化財の調査についても協議された。この協議を経て、11月に事業計画が福岡町教育委員会に連絡された。

当初計画段階での工期は、6年間が見込まれ、平成12年度に新規採択、平成13年度から工事着手が予定されていた。事業対象面積は、中山間地域総合整備事業全体での経費配分の問題もあり、確定されていなかったが、最大限に見積もった事業面積15haが分布調査対象地となった。

当時、沢川地区で遺跡の存在が把握されていたのは沢川北遺跡と沢川南遺跡のみであり、計画的な分布調査が行なわれていない区域であったことから、まず、事業対象地全域の分布調査が必要であることを説明した。調査は、降雪の影響もあり雪解け後に実施することとなった。

その後、平成11年3月12日、県農地林務事務所・町農林課・町教委で協議を行い、3月18日には、県埋蔵文化財センター・県農地林務事務所・町農林課・町教委で協議を行った。この結果、分布調査を行い遺跡の有無を把握した後、試掘調査を行って遺跡の遺存状況を確認し、遺跡の保護措置を講じる調査方針が決定した。



第２図　分布調査対象地（1/10,000）

第３章　調査概要

第１節　分布調査

平成11年４月12日、町教委と県埋文センターによって下記のとおり分布調査を実施した。

第１表　分布調査内容一覧

期　日	調査担当	対象面積	遺跡推定地名　称	遺跡推定地面　積	採　集　遺　物
1999 4.12	福岡町教育委員会 文化財保護主事　栗山　雅夫 富山県埋蔵文化財センター 係　長　久々　忠義 主　任　岡本淳一郎 文化財保護主事　境　洋子 〃　高梨　清志 〃　高橋　真実	15ha	TH－01	19,350㎡	縄文石器(剥片)、染付、越中瀬戸、近世陶磁器
			TH－02	3,030㎡	縄文石器(磨製石斧)、近世陶器
			TH－03	13,950㎡	縄文土器、縄文石器(石鏃・剥片)、近世陶磁器
			TH－04	5,722㎡	珠洲焼、越中瀬戸、近世陶磁器

遺物の多くは、大谷川と北谷川が形成する谷に挟まれた平坦地で採集された。中でも、TH－03地区は縄文の遺物が集中的に採集された。また、近世初頭まで旧集落があったと伝承されるTH－01地区は、中世～近世の遺物が他地域より多く採集されており、その存在を伺わせるものであった。

分布調査と平行して小字の聞き取りをおこなったところ、TH－01地区では「オオヤシキ」「ゴウラ」といった建物の存在を想定させる字名とともに「ヌマノヘラ」「ウマバチ」「ムカイマエダ」などの字名が伝えられていることが確認された。加えて、TH－02地区では「ショウズバタケ」「コヤチ」、TH－03地区では「ヌゲダ」「キボダ」、TH－04地区では「カマダ」、沢川北遺跡では「マエダ」という字名が伝承されていることもわかった。

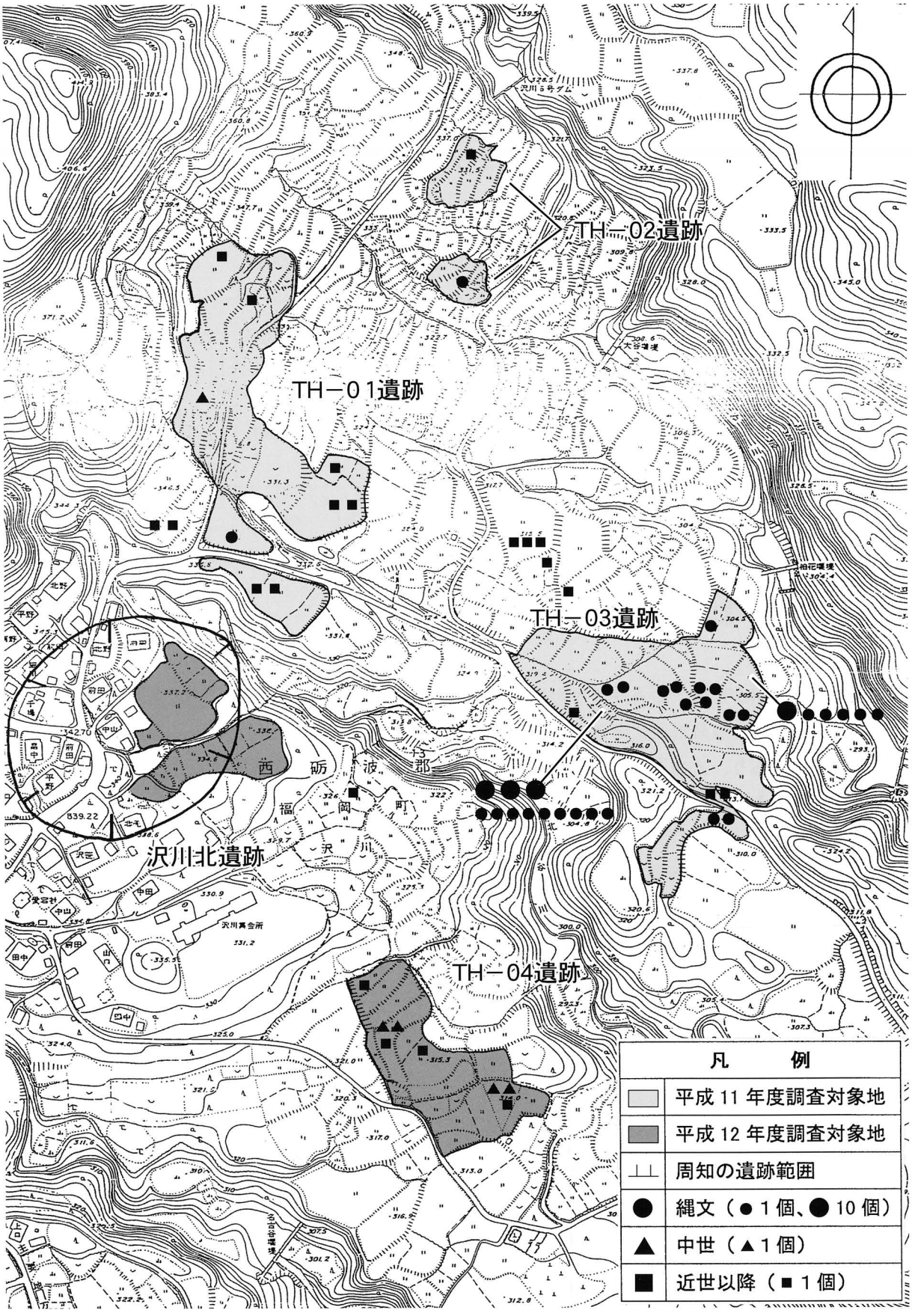
第２節　試掘調査

１．試掘調査の経過

試掘調査は、分布調査によって推定された遺跡について、遺跡の詳細な範囲や遺構・遺物の遺存状況を確認するために実施した。

調査対象地は分布調査によって確認されたTH－01～TH－04遺跡に周知の埋蔵文化財包蔵地である沢川北遺跡を加えた約47,000㎡である。

試掘調査内容は第２表のとおりである。



第 3 図　分布調査結果と試掘調査対象地（1/4,000）

第２表　試掘調査内容一覧

	期　間（実働）	調　査　担　当　者	遺跡名称	対象面積	発掘面積	遺存面積	備　　考
平成11年度	1999.10. 4 ～10.26（４日）	福岡町教育委員会 文化財保護主事 栗山　雅夫 富山県 埋蔵文化財センター 主任　岡本淳一郎	TH－01	19,350㎡	244㎡	0㎡	遺跡抹消
	〃（１日）		TH－02	3,030㎡	20㎡	0㎡	遺跡抹消
	〃（６日）		TH－03	13,950㎡	372㎡	7,000㎡	沢川ヌゲダ遺跡に名称変更
平成12年度	2000. 9.25 ～12.25（５日）	福岡町教育委員会 文化財保護主事 栗山　雅夫	TH－04	5,722㎡	268㎡	0㎡	遺跡抹消
	〃（５日）		沢川北	5,232㎡	291㎡	1,400㎡	範囲縮小

２．ＴＨ－０１遺跡

（１）概況

大谷川と北谷川が形成する谷間の平坦地に位置し、標高は330m～350m付近である。このレベルは調査対象地の中でも最高所にあたる。小区画の水田が多く棚田景観を呈しているため、重機が進入できない箇所があり、人力掘削のトレンチも存在する。試掘対象地に隣接して、田畑家の旧屋敷地があったとされる水田がある。

トレンチは合計26本設定した。基本層序は、１層：黒褐色シルト（耕作土）、２層：暗褐色シルト（谷の埋土）、３層：黄色又は黒褐色シルト（礫30％程度含む）となる。耕作土直下に、３層の地山が現れる例が多い。

（２）遺構

遺構は確認されなかった。

（３）遺物（第10図）

遺物は近世陶磁器が散発的に出土した。特記すべきものとしては、24Ｔの谷の埋土から、中国製染付皿と唐津壷が出土した。

１は外面に密で細かい唐草を描き、内面にアラベスクと梵字を組み合わせる。小野分類「Ⅷ類」（B_1群）にあたるもので、16世紀代に比定される。口縁部は遺存しないが、口縁部が端反形態となるものである。２は外面に数条の沈線を施し、格子目の当て具痕を内面にもつ叩き成形の唐津壷で17世紀前半の時期のものである。

（４）小結

遺跡近くに、中世以降、近郷の有力者であった田畑家の旧屋敷地が隣接して存在したと伝承されていることは前述したとおりである。また、近世初頭まで旧沢川集落が存在したとされる場所にも該当

している。したがって、中世段階の集落跡が検出されるものと考えられたが、遺物包含層・遺構は確認されなかった。当調査区の基本層序は表土・谷の埋土・地山となる礫層で構成されており、集落移転を余儀なくされた大規模な地すべりの結果当時の生活地盤が流出し、遺跡が消滅したものと推測される。しかし、わずかに発見される遺物の中には中世～近世初期にかけてのものが含まれており、旧沢川集落の実在を裏付ける資料である。

3．TH－02遺跡

（1）概況

TH－01遺跡から80m程離れた場所で、同一地形に位置している。標高330m付近である。表採地点の相違から2箇所で1つの遺跡とした。

トレンチは、4本設定した。基本層序は、1層：黒褐色シルト（表土）、2層：黒褐色粘質土、3層：黄褐色礫となる。

（2）遺構

遺構は確認されなかった。

（3）遺物（第13図）

表土中から近世陶磁器が2点出土したのみであった。

分布調査では、60の流紋岩を用いた磨製石斧（40g）が採集された。

（4）小結

基本層序・地形は、TH－01遺跡と同じ傾向をもつものであるが、遺物・遺構等旧沢川集落関係のもの、表採された磨製石斧（縄文）の時期に関係するものは確認されなかった。

4．TH－03遺跡（調査後、沢川ヌゲダ遺跡に名称変更）

（1）概況

TH－01・TH－02の南東に位置し、標高307m～320m付近である。

トレンチは、27本設定した。基本層序は、1a層：黒褐色シルト（表土）、1b層：暗褐色シルト、1c層：黒褐色シルト（旧表土）、1d層：暗褐色礫（土石流の痕跡）、2a層：暗褐色シルト、2b層：黒褐色シルト（粘性強）、3a層：黄褐色粘質シルト（礫含む）、3b層：明黄褐色砂礫

2a・2b層が縄文後期前葉を主体とする遺物包含層。時期幅は、縄文中期前葉・後葉・後期前葉である。

（2）遺構

遺構は、標高311m付近で住居址の可能性がある、SX01～04が検出された。この遺構は覆土中に炭化物と遺物を少量含む。このうち、20Tで確認されたSX02は、東側の掘込みが60cm余り垂直に立ち上がっており、遺存状況は極めて良好である。同トレンチでは、SX03・04が並んで検出されており、断ち割りしていないが、同様の掘込みをもつものと考えられる。

この遺構群から一段下がった標高308m付近では、穴が確認される程度であるが、縄文時代の遺物包含層が谷を埋めるような形で確認された。

（3）遺物（第10～13図）

縄文土器の遺物包含層は谷部の埋土の中で確認され、遺物を多く包含する土層とそうでない土層の

２種確認できた。前者は、13～15Ｔ・17Ｔの東側と22Ｔの東側がこれにあたる。後者は、16Ｔ・17Ｔの西側・19Ｔの東側がこれにあたる。遺物の多く含む谷のうち、標高が低い方のトレンチでは、中期前葉～後期前葉の土器が出土したのに対して、５ｍほど標高が高い22Ｔでは後期前葉の土器だけが出土している。ただ、このトレンチは遺物包含層が厚く堆積し、地山まで掘削することができなかったため、もっと深いところに中期まで遡る土器が存在する可能性はある。

遺物包含層は、分布調査の結果から判断すると標高315mに位置する１～４Ｔにも存在するものと考えられ、遺物包含層と同じ土層も確認されたが、遺物は出土しなかった。

主体を占める土器は、縄文時代後期前葉に位置付けされる気屋式土器である。

３～６、57～59は15Ｔから出土したものである。３は上下を沈線で区画された隆帯に刻目を施す。４は鉢の底部付近で、幅細の条線文が縦にひかれる。ともに、縄文時代中期後葉の串田新式土器に比定される。５は沈線区画内部が棒状具で連続刺突されるもので、前田・岩峅野式土器に比定される。６は、深鉢の頸部に連続する刺突文と胴部に沈線を施すもので、後期前葉の気屋式土器に比定される。57は土器底部外面の縄文圧痕。58は砂岩質の凹石（430ｇ）で、59は硬質砂岩を用いた磨製石斧（182ｇ）の刃部欠損品である。

７・８は17Ｔから出土したものである。７は隆帯上に連続する刻目をもつもので串田新式に、８は口縁部外面にキャタピラ状に刻目を入れ、幅広で浅い沈線を施すもので気屋式に比定されるものである。

９～43、53～55は22Ｔから出土したものである。このトレンチは遺物包含層の確認面が深いうえ、土層も厚く堆積しており、重機の掘削深度の限界を超えたため、幅50cm深さ30cm程度をさらに人力掘削したところ、気屋式段階の土器が整理箱４箱分出土した。器種は、深鉢が大半を占め、浅鉢がわずかに混じる。深鉢は、口縁部が丸く内湾するA形式、直立して肥厚するB形式、外反するＣ形式の三種に分類した。形式判定ができた17点のうち、Ａ形式は12点70.6％、Ｂ形式は3点17.6％、Ｃ形式は２点11.8％とＡ形式が大半を占める。

９は隆帯上に棒状具による刻目が連続して施される。縄文中期後半の串田新式段階のものと考える。22Ｔ出土の実測図で中期のものはこの１点だけで、残りは後期の気屋式段階のものである。10は内湾する口縁部に沿って波状沈線を施している。気屋式土器のメルクマールである三角形連続刺突文が出現する直前のもので、前田・岩峅野式土器と気屋式土器の結節点にあたるものである。この段階の土器を気屋式の範疇として捉えるかどうか未だ結論に至っていないが、「いわゆる気屋式土器」（米沢1996）の始原的なものに位置付けされるものである。

深鉢Ａ形式（口縁部が丸く内湾）：11～22

12～15は頸部から外反し口縁部で内湾する器形で、数条の沈線を巡らすものである。沈線内に刻目を伴うものと伴わないものがある。16は幅広の、17は幅狭の沈線で幾何学的文様を施すものである。これらは、三角形連続刺突文を施文しないか、確認できなかったものである。18～22は三角形連続刺突文が施文されるものである。18は口縁部近くの沈線内に刻目を施し、間隔をやや広くとる三角形連続刺突文は浅く扁平な印象を与える。19は器壁に対して垂直に近い角度から深く刺突するもので密に施文される。20・21は前二者の中間的なものであるが、21のほうがより平面的である。三角形連続刺突文だけでみると、19→20→21→18の変遷を想定できる。20は波状口縁、21は口唇部に幅狭の刻目を入れる。22は上端の稜線が連なっており三角形連続刺突文でなく刻目の可能性もある。

深鉢Ｂ形式（口縁部肥厚、直立気味に立ち上がる）：23～25

23の連続する棒刺突は最も深いもので1.2cmを測る。24の三角形連続刺突文は深く密に２列施文する。25は口唇部に斜行する刻目を施す。

深鉢Ｃ形式（口縁部外反）：26・27

27は口唇部に斜行する刻目を施す。波頂部は三連の棒刺突を配し、中心のものが両脇のものより大きい。26・27ともに波状口縁である。

28～30は浅鉢である。28と29は同一個体で、口縁部が強く内湾する。ともに、浅く幅広の沈線で幾何学的文様をもち、胎土に赤色酸化粒を多く含む。30は波状口縁で口縁部が内屈気味に立ち上がるものである。把手を中軸線として、左右対称の器壁外面は沈線で長方形区画され、区画内には深い棒刺突を施す。

31～43は胴部破片とＡ～Ｃに分類できなかったものである。このうち、31～40は胴部より上側の破片で、41～43は胴部～底部に至る部分である。31・32はともに２列以上の三角形連続刺突文が施文される。33は長方形や三角形に区画された沈線内を縄文で充填する。34は幅広の沈線を縦に深くひき、沈線内刻目を交互に施文する。刻目は、先の丸い棒状具の尖端を右奥に押圧し、そのまま左に倒すことで１単位としている。36は幅狭の沈線で三角形の区画文を施す。37～39は同一個体で、棒状具による連続刻目を境にして上部は幾何学的文様、下部は縄文が施文される。

（４）小結

15Ｔで縄文中期前葉の新崎式、中期後葉の串田新Ⅰ・Ⅱ式、中期末～後期初頭の前田岩峅野式、後期前葉の気屋式の土器が出土しており、中期前葉、中期後葉～後期前葉に至る集落の存在が想定される。

この遺跡は、これまで圃場整備を受けていなかったこともあり、遺跡の遺存状況は良好である。約80cm余り堆積（確認出来た範囲）した縄文時代の遺物包含層や、深い掘り込みをもつ住居址？・穴の存在はこのことを裏付けている。調査の結果、対象地の中でも遺構・遺物の検出状況をもとに、分布調査によって想定されたＴＨ－03遺跡の範囲をさらに絞り込む形で「沢川ヌゲダ遺跡」と名称・範囲変更した。遺跡の面積は、約7,000㎡となる。

５．ＴＨ－０４遺跡

（１）概況

これまでの遺跡とは、谷をひとつ隔てており、北谷川・名古谷川に挟まれた尾根上の平坦地に位置している。標高は、315m～323mを測る。

トレンチは、18本設定した。基本層序は、１ａ層：暗褐色シルト、１ｂ層：暗褐色シルト（固く締まり、小礫15％含む）、２ａ層：黒色シルト（小礫10％含む）、２ｂ層：黒褐色シルト（小礫10％含む）、３ａ層：褐色シルト、３ｂ層：明褐色砂礫となる。また、遺跡内には、大きく分けて２つの谷筋が入っている。

（2）遺構

１ｂ層・２ａ層から３ａ層を掘り込む浅い土坑がわずかに確認されたのみで、遺物は含まず、まとまりをもつものは確認されなかった。

（3）遺物（第13図）

近世陶磁器が１ｂ層から数点出土した。この１ｂ層は表土直下の土層であり、出土遺物が少量であること、水田に伴うものと思われる鉄分沈着層が三面確認できる場所があること等を考慮すると、純粋な遺物包含層が遺存しているとは考えられない。

特記すべきものとして、３Ｔで出土した56は、『九州陶磁の編年』盛峰雄氏の編年Ⅱ期（1610～1650年代）に比定される砂目積みの灰釉皿である。高台内には、兜巾と呼ばれる円錐状の突出した削り残しが見られる。

また、小片のため図化していないが、端反りの染付碗の口縁部が出土している。小野分類の染付碗Ｂ群にあたり、16世紀後半のものである。

（4）小結

全体的には安定した堆積をもつが、ところどころに、谷地形を埋めるようにして２ａ・２ｂ層が存在する。この２層は、縄文土器が出土した沢川ヌゲダ遺跡の遺物包含層と土質・層位の点で類似するものであるが、遺物は出土しなかった。

ただ、16世紀～17世紀前半に位置付けられる遺物が出土し、分布調査によって珠洲焼が表採されていることを考えると、過去に該期の遺構が存在していた可能性がある。

6．沢川北遺跡

（1）概況

ＴＨ－04遺跡の北西にあり、現沢川集落も一部含まれる。この遺跡からは、昭和40年前後に縄文土器が表採されており、分布調査を行う以前から遺跡とされていた。調査対象地のうち、13～16Ｔを設定した水田は、この集落で最も大きな面積をもつ水田のひとつである。

トレンチは19本設定した。基本層序は、１ａ層：暗褐色シルト（表土）、１ｂ層：暗褐色シルト（礫混）、２ａ層：黒褐色シルト、２ｂ層：黒色シルト（縄文遺物包含層）、３ａ層：褐色砂礫となる。このうち、２ｂ層は厚さ30～50cmの遺物包含層である。

１～12Ｔと13～19Ｔの間は２m近い崖になっており、この崖下際を水路が流れている。谷地形は、南の低い方で確認され、ＴＨ－04遺跡と同様、東にある北谷川に向かって落ち込んでいる。

（2）遺構

14Ｔにおいて、小穴がまとまって確認できたが掘り込み面ははっきりしない。

（3）遺物（第12～13図）

13～16Ｔの２ｂ層から縄文中期前葉～後期後葉の土器が出土した。このうち、主体を成すのは中期中葉の古府式に比定される土器群である。完形に近い形状を止めているものは確認されなかったが、保護層の役割を果たす上層の土は比較的厚く堆積しており遺存状況は良好である。

44・45は縄文時代中期前葉でも新崎Ⅱ式に比定される。44はキャリパー状に内湾する口縁に「入」字状突起を口縁端部にもつ。この突起部分のある口縁最上段は綾杉状の刻目が施され、同じ刻目は縦に引き下ろされる隆帯にも施される。この隆帯の両脇は半隆起線で加飾される。45は隆帯上に爪形

文を連続させ、口縁内側に隆帯による段を設ける。

46・47は縄文時代中期後葉の串田新Ⅰ式に比定される。46は波状口縁で、沈線による渦巻文と貝殻腹縁による連続波状圧痕が施文される。47は貝殻腹縁押圧文によって区画される工字状文と摩滅により明確でないが、貝殻腹縁圧痕が認められる。

48・52は縄文時代後期の井口Ⅱ式に比定される。48の口縁部は内湾する波状口縁で「口周沈線」は3条の沈線で「寸断文」は巻貝の側面を押圧した扇形圧痕文である。52の寸断文も扇形圧痕である。

49～51は縄文時代中期中葉の古府式土器に比定される。49は上下を沈線で区画した内側に0段多条の縄文が施される。50・51は半裁竹管によって半隆起線の渦巻文が施文され、50の渦巻文内の隆帯は櫛状具による刺突文が施される。

（4）小結

本遺跡は、周知の遺跡として縄文時代中期の年代が与えられており、今回の試掘調査により確認された内容とほぼ同じものである。調査によって中期中葉が主体というレベルまで絞り込むことができたことにより、後期初頭を主体とする「沢川ヌゲダ遺跡」とのつながりを考える上で貴重なデータを提供するものといえる。

なお、崖下に位置する1T～12Tでは、谷の埋土において縄文遺物包含層と同様の土が検出されたが、遺物は確認されなかった。したがって、遺跡の境界はこの崖に沿って存在するものと考えた。

第4章　まとめ

気屋式土器の様相

この土器型式は米沢義光氏による一連の編年案が提示されているが、遺構に伴わず包含層からの出土例が多いという出土状況が編年の確定を困難なものにしている。特に、どの段階から気屋式土器とし、どの段階で次形式とみなすかについては未だに決着していない。ここでは、氏の編年作業の成果を参考に、沢川ヌゲダ遺跡出土の気屋式土器の特徴を紹介する。

土器の特徴は、口縁部から頸部にかけて施文される三角形連続刺突文である。この文様の有無を重視して設定されたのが「いわゆる気屋式土器」（宇ノ気町教委1996）の古・中・新段階の土器群である。本遺跡出土の三角形連続刺突文には、以下の特徴がみられる。

①三角形連続刺突文の先駆とされるもので、波状沈線を口縁部にもつ

②器壁に対して垂直に近い角度から刺突され「く」字状に連続する平面形態をもつ。

③施文の深さが3㎜以上あり、単位間隔が密で矢羽状を呈する。

④施文の深さが3㎜以上あり、前後の三角形と距離を空ける。

⑤押圧に近い印象を与えるほど浅く、前後の三角形と距離を空ける。

これらは、①→⑤の方向で新しくなっていくものと考えている。しかし、出土点数の数量もさることながら全体器形がわかるものが出土しておらず、古・中・新のどの段階に帰属させていくか判断することは避けておく。ただ、口縁部を内湾させるものが多く含まれており、古・中段階に分類できるものが多いようである。

気屋式土器出土状況と遺跡存続時期の相関関係について、富山県は中期から継続し後期中葉以降も存続する場合が多いのに対して、能登は中期後半から資料が増加しはじめ気屋式の新段階で消滅する

ものの多いことが報告されている。（気屋式土器検討会1995）沢川ヌゲダ遺跡の開始期は中期前葉、新崎段階まで遡るが少量である。むしろ、気屋式土器を最後に土器出土が途絶える点を重視するなら能登に近いのかもしれない。沢川地区が宝達山を挟んで能登に近接している地理状況が、要因として考えられよう。

集落について

今回の調査により、沢川北遺跡と沢川ヌゲダ遺跡には、縄文中期前葉～後期に至る集落が存在していたものと推測される。調査面積が微小な試掘調査であり、明確な住居址を確認できたわけではないため概観的なものとなるが、両遺跡の関係を含めて沢川集落の成立を記しておきたい。

中期中葉を主体とする沢川北遺跡と後期前葉を主体とする沢川ヌゲダ遺跡は、出土遺物の時期差を重視するなら、沢川北遺跡から沢川ヌゲダ遺跡への生活主体の移動を読み取ることができる。沢川ヌゲダ遺跡の土器群は、中期前葉に現れ、中期中葉を空白時期とし、中期後葉にジャンプして後期前葉の気屋式土器を主体とする。一方、沢川北遺跡は中期前葉の新崎Ⅱ式段階から後期後葉の井口式段階まで存続するが、主体となるのは、中期中葉の古府式期である。このことから、遺跡は同時期に成立し、中期中葉には沢川北遺跡、後期前葉には沢川ヌゲダ遺跡が「ムラ」の中心的な場所になったといえる。二遺跡間の距離が300m程度しか離れていないことを考慮すると、これらの遺跡は互いに独立した別個の集落というよりも何らかのつながりを考えたほうがよいのかもしれない。この後、後期前葉に生活の中心地であった沢川ヌゲダ遺跡が消滅するのに対して、沢川北遺跡は出土点数が少なくなりながらも後期後葉まで遺跡が存続したことを確認できる。

縄文期の集落が廃絶したあと、沢川地区に再び集落の存在が確実に認められるのは、中世後半の16世紀になってからである。伝承によれば、12世紀末に集落の出現を確認できるが、古文書が遡るのは16世紀までであり、出土遺物の時期も16世紀以降のものとなるため、これ以前の集落の存在を証明することはできない。これらのことから、沢川集落は縄文中期中葉に始まり、後期後葉以降に一度断絶する時期を経て、中世後期になり再び集落が成立し、現在に至っているものと考えられる。

参　考　文　献

米沢義光　1983　「羽咋郡志賀町火打谷大垣内遺跡出土々器再見」『北陸の考古学　石川考古学研究会々誌第26号』石川考古学研究会

米沢義光　1989　「気屋式土器様式」『縄文土器大観　4　後晩期』小学館

米沢義光　1986　「第14群土器　気屋式期・第15群土器気屋Ⅱ式期」『石川県能都町真脇遺跡（本編）』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団

宇ノ気町教育委員会　1996　『宇ノ気町気屋遺跡』

気屋式土器検討委員会　1995　『気屋式土器検討会資料』

福野町教育委員会　1990　『安居五百歩遺跡Ⅰ』

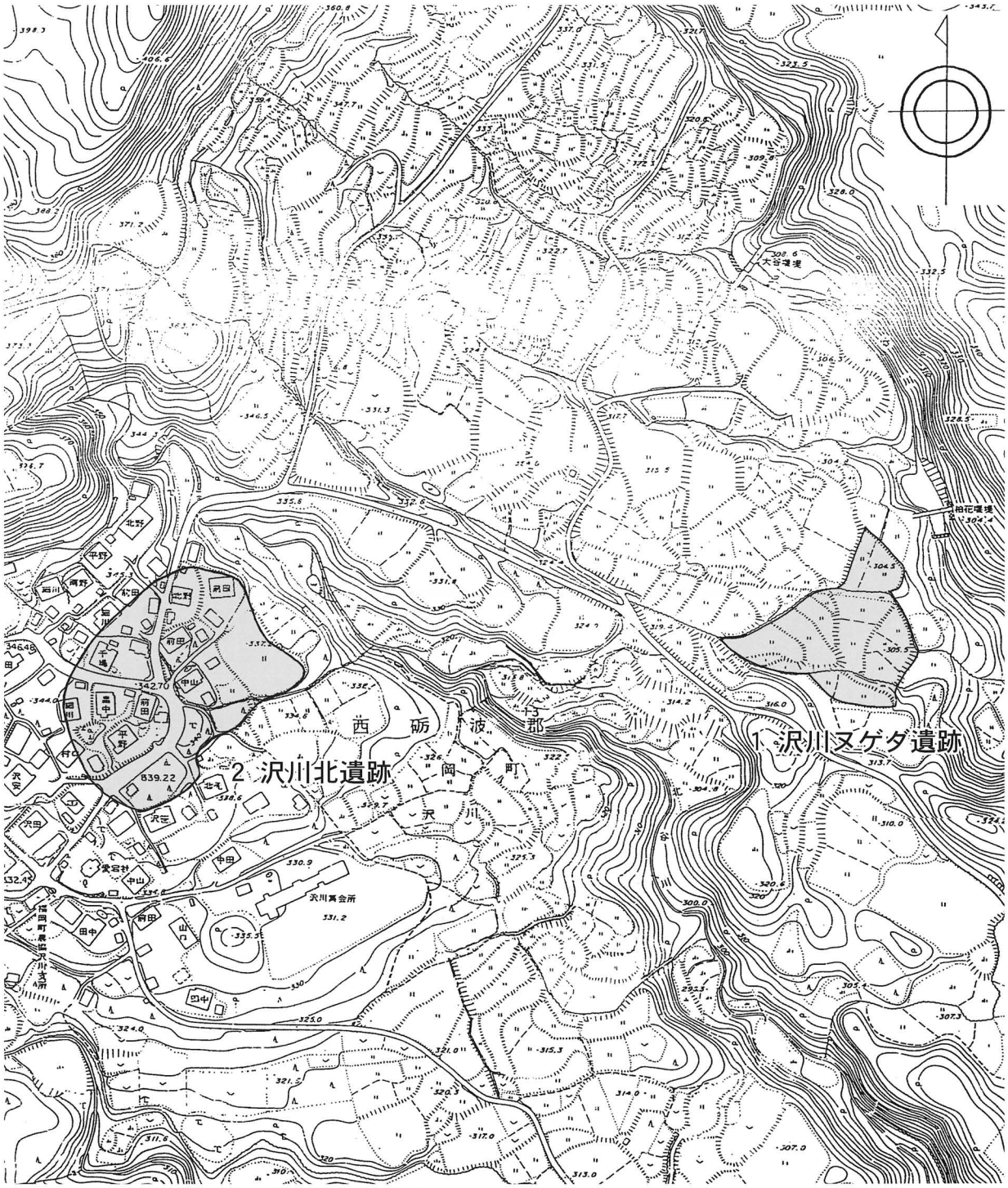
富山県教育委員会　1991　『北陸自動車道遺跡調査報告　朝日町編6　境A遺跡　—土器編（本文）—』

小野正敏　1982　「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№2

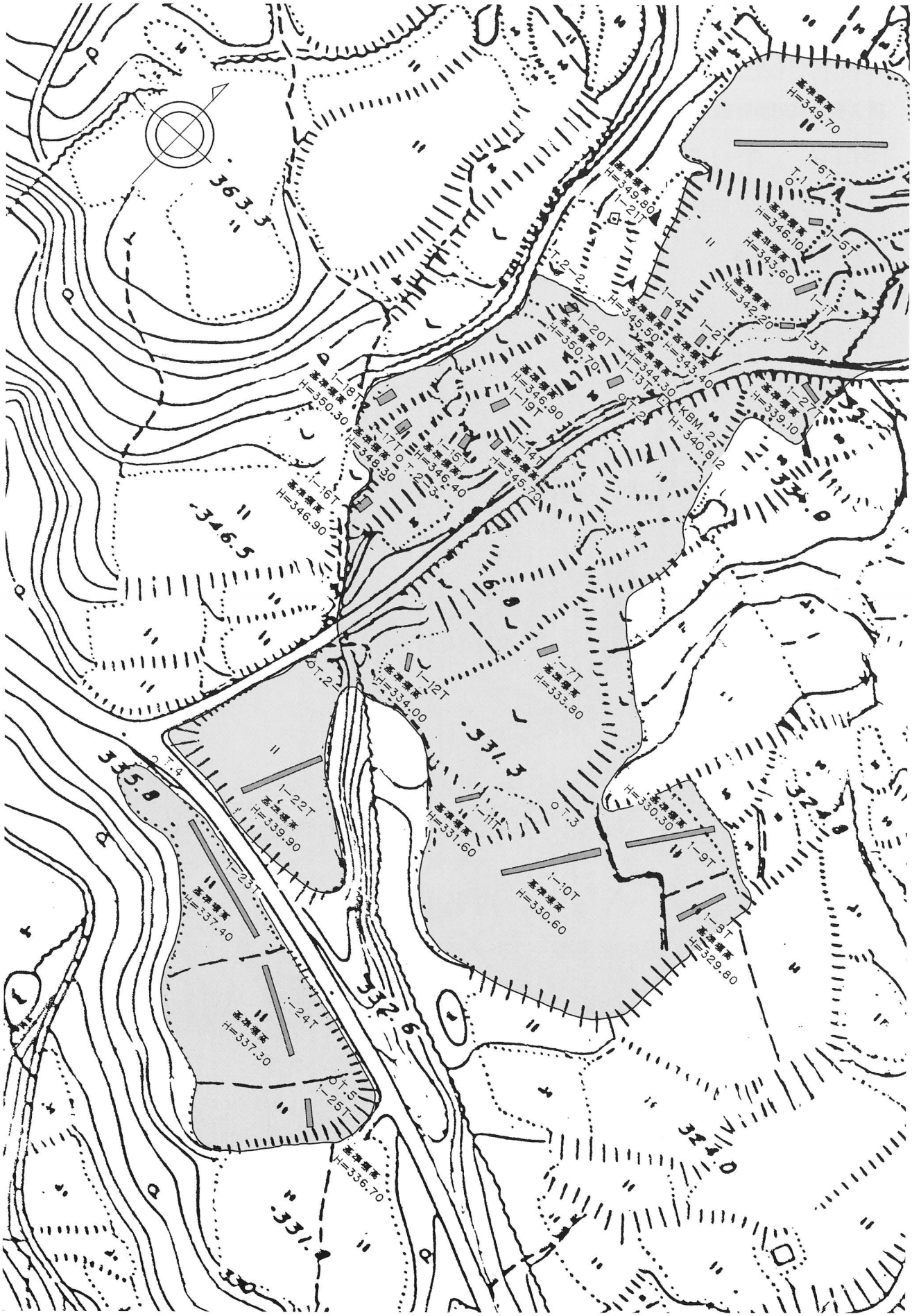
九州近世陶磁学会　2000　『九州陶磁の編年』

第３表　試掘調査終了後の遺跡総括表（平成13年３月現在）

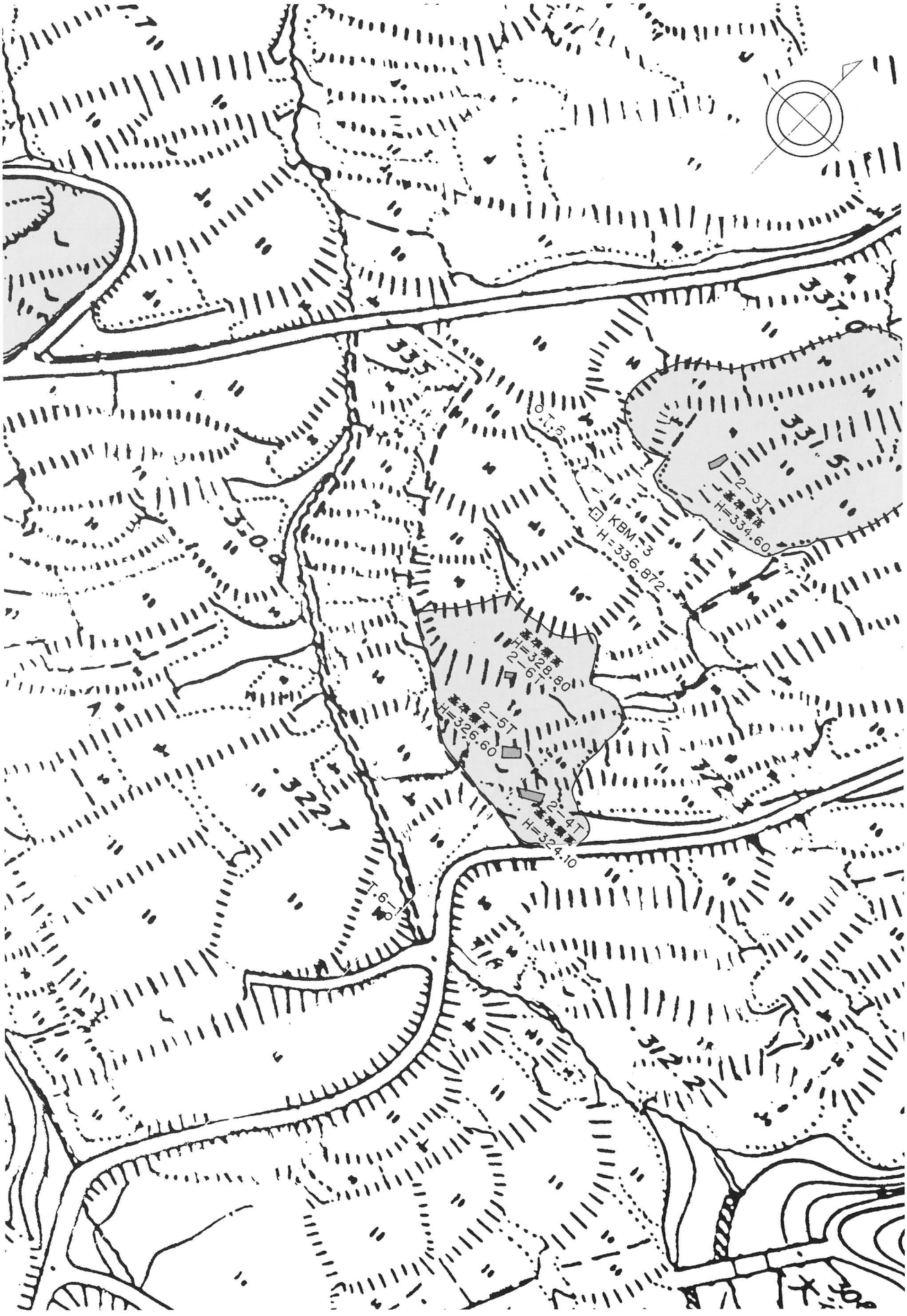
番号	遺　跡　名	時　代	遺跡の種類	面　積	備　考
1	沢川ヌゲダ遺跡	縄文(中期～後期)	集落	7,000㎡	旧TH－03遺跡
2	沢川北遺跡	縄文(中期～後期)	集落	13,560㎡	範囲縮小



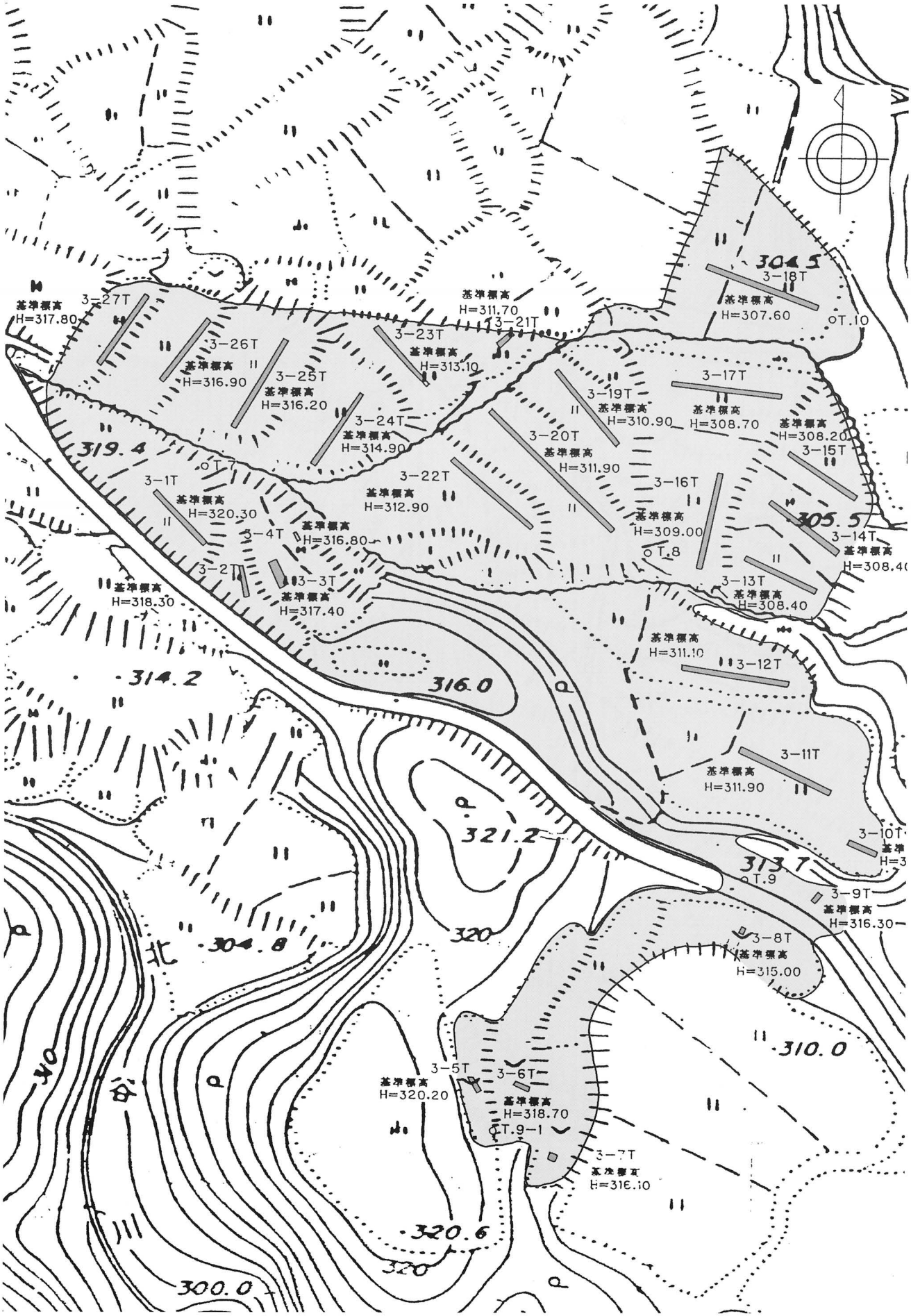
第４図　試掘調査終了後の遺跡分布図（1/4,000）



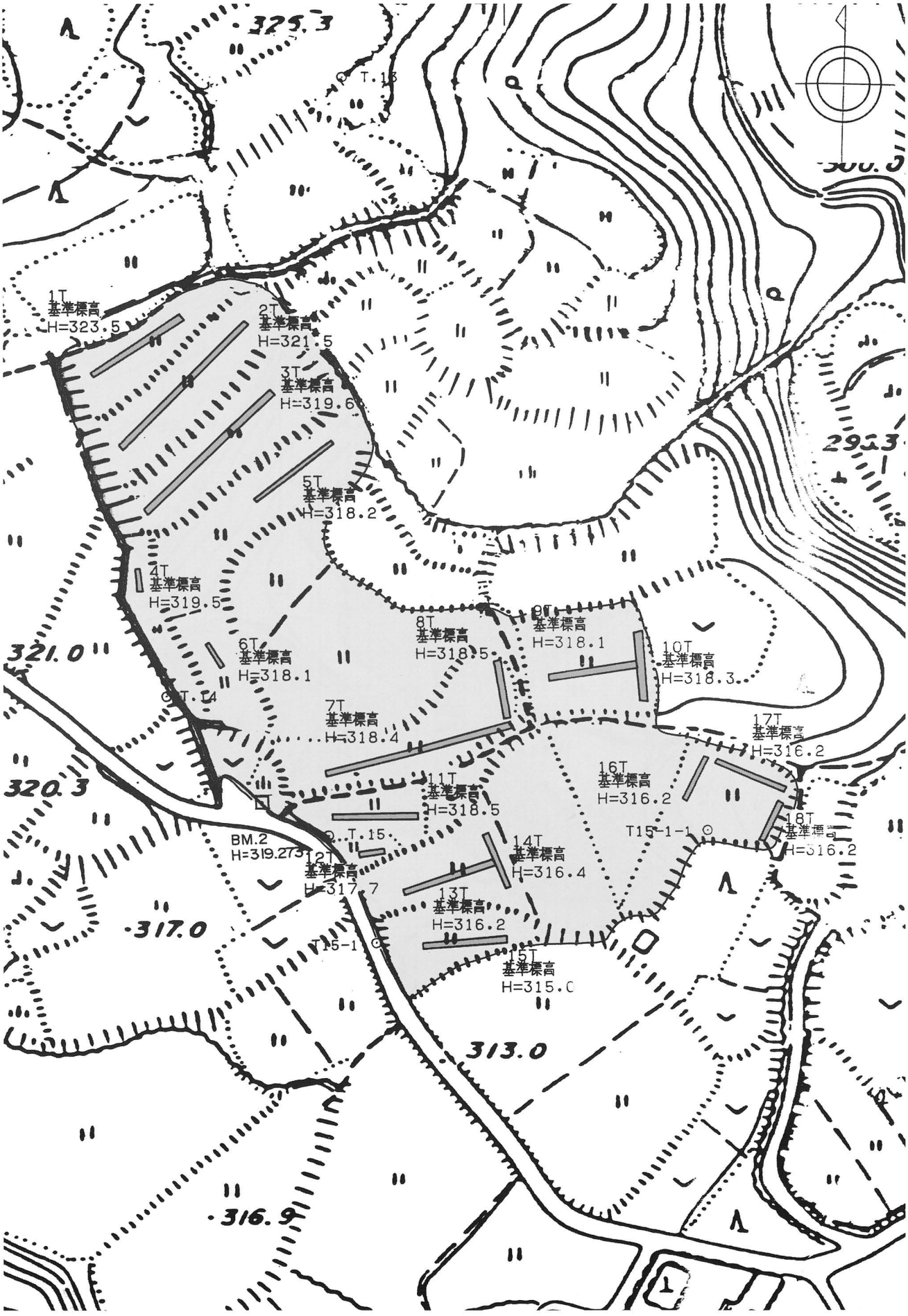
第５図　試掘調査概要図（1/1,000）



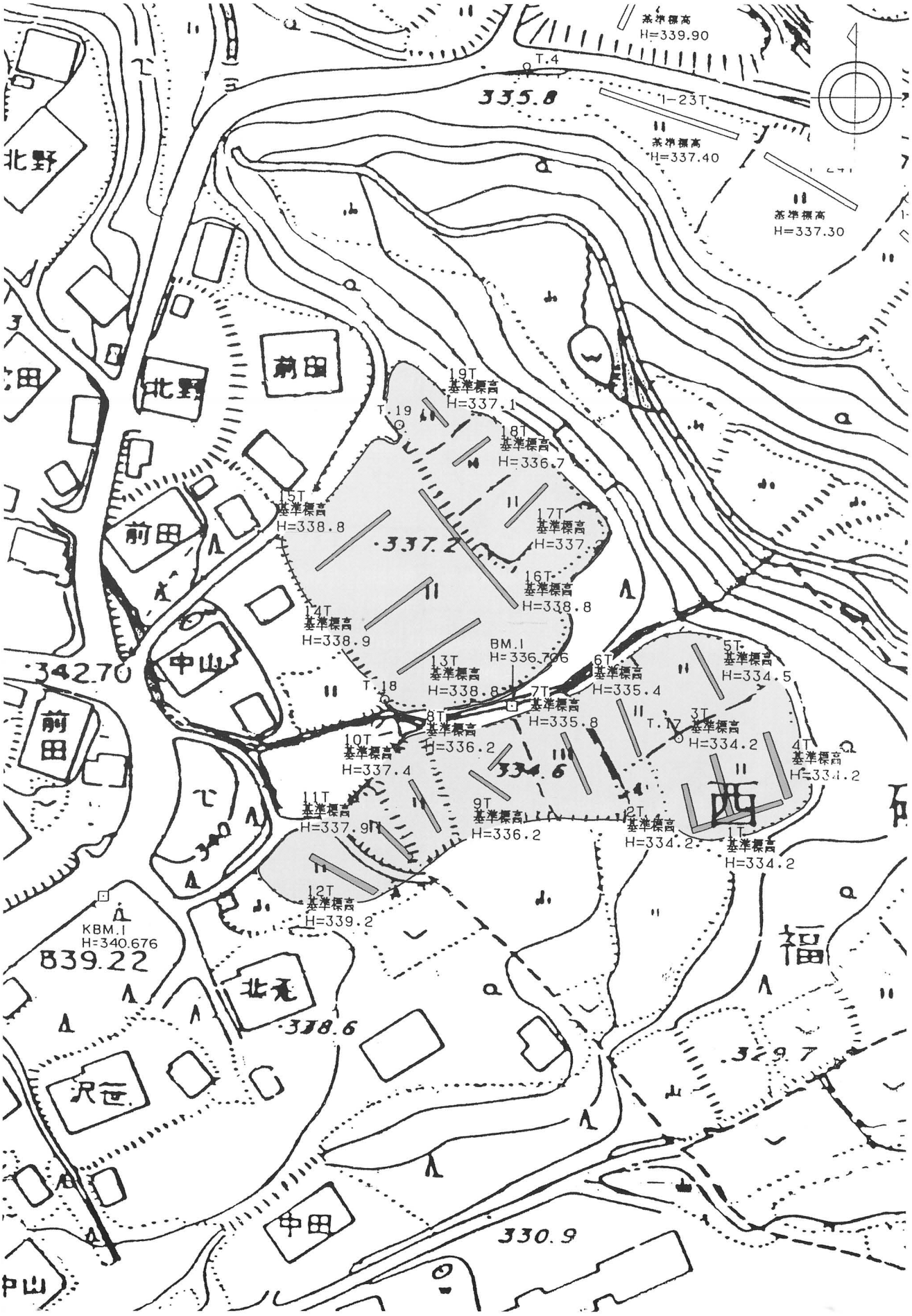
第６図　試掘調査概要図（1/1,000）



第７図　試掘調査概要図（1/1,000）

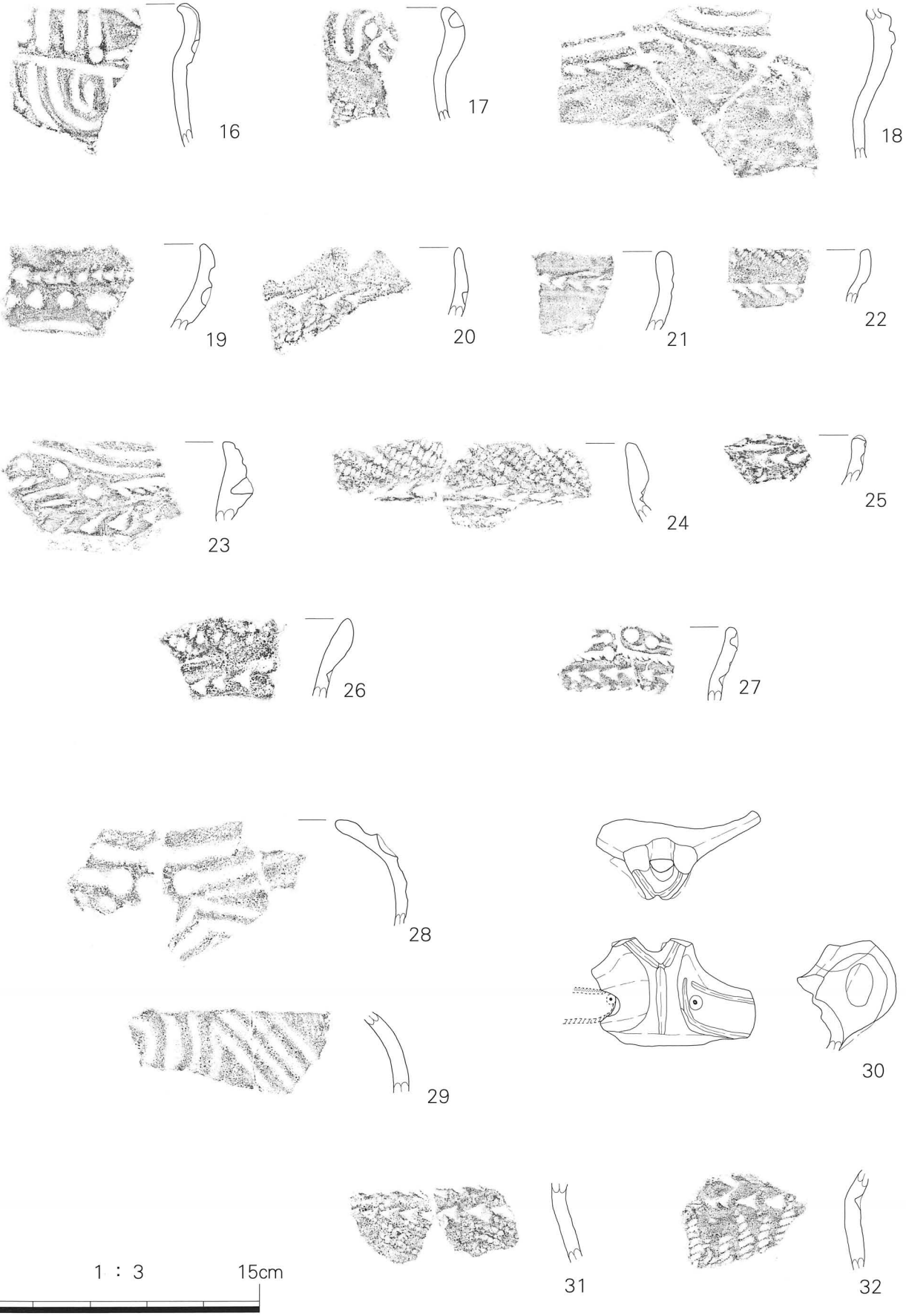


第８図　試掘調査概要図（1/1,000）



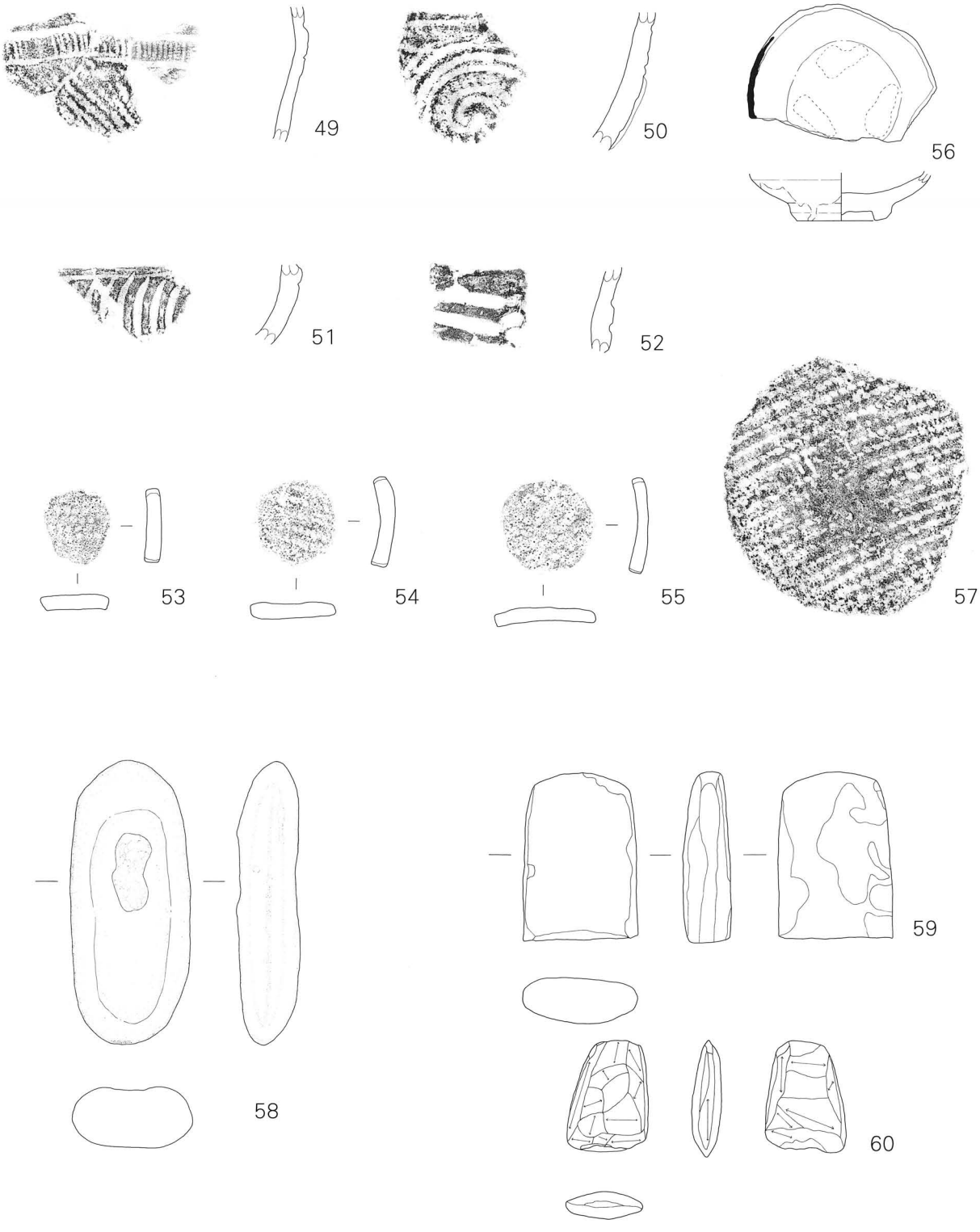
第９図　試掘調査概要図（1/1,000）

第10図　遺物実測図（1/3）



第11図　遺物実測図（1/3）

第12図　遺物実測図（1/3）



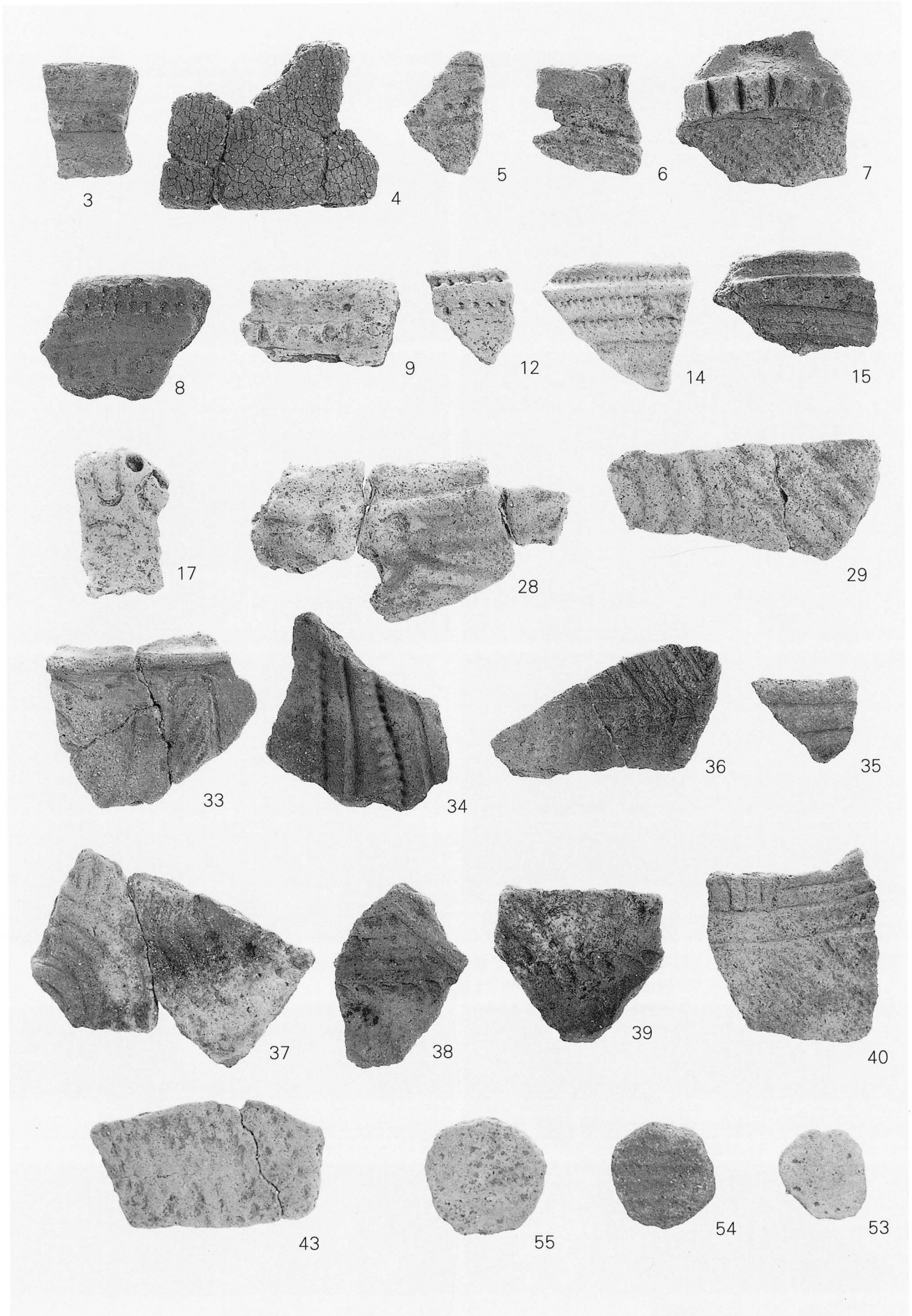
第13図　遺物実測図（1/3）　　※59・60は（1/2）

〈沢川ヌゲダ遺跡〉　1. 12T遺構検出状況　2. 20T全景　3. 20T遺構検出状況　4. 20TSX04の掘り込み
5. 19T南壁層序　6. 17T遺物出土状況

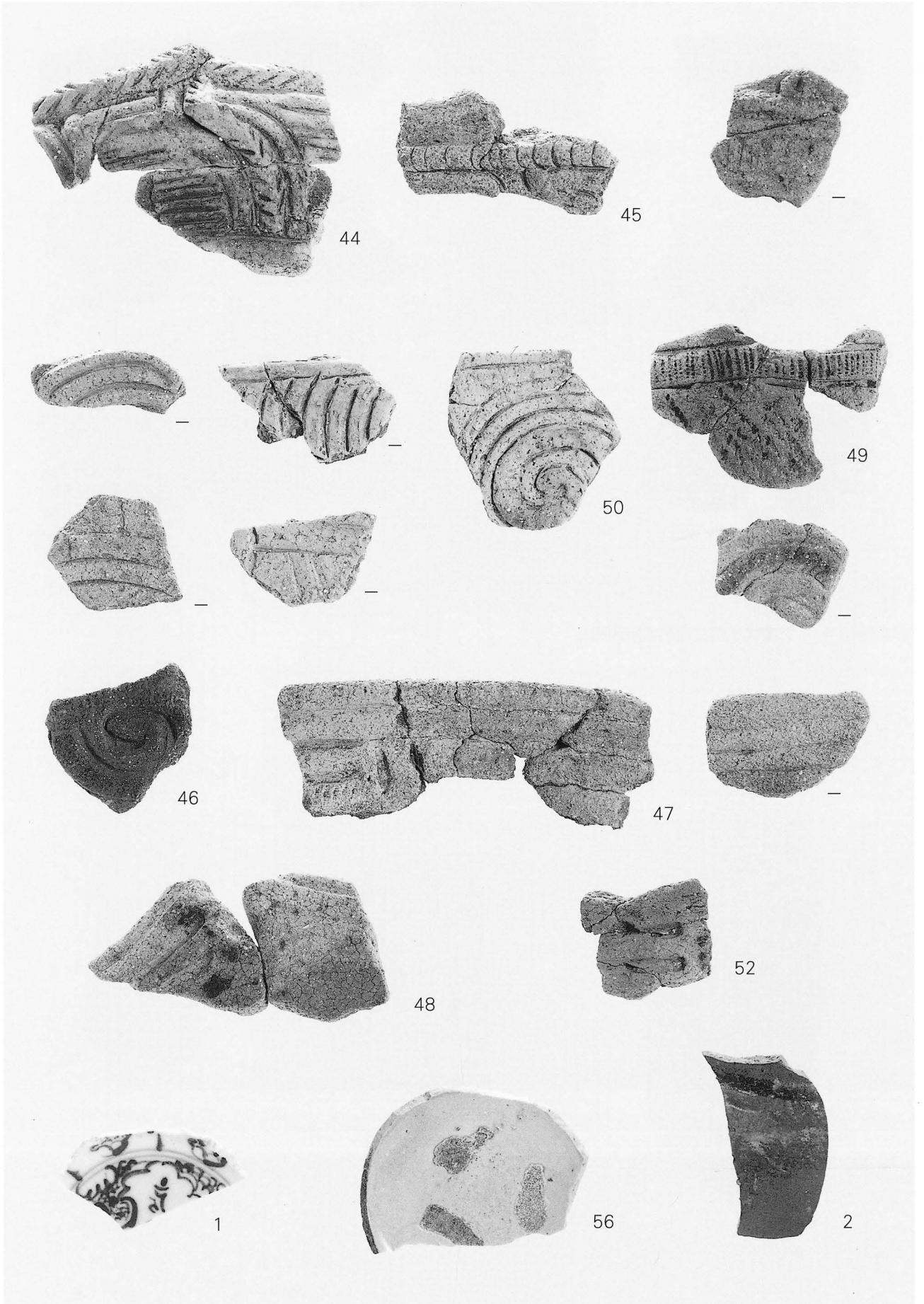
〈沢川北遺跡〉　7. 16T北壁層序

〈TH－04遺跡〉　8. 作業状況

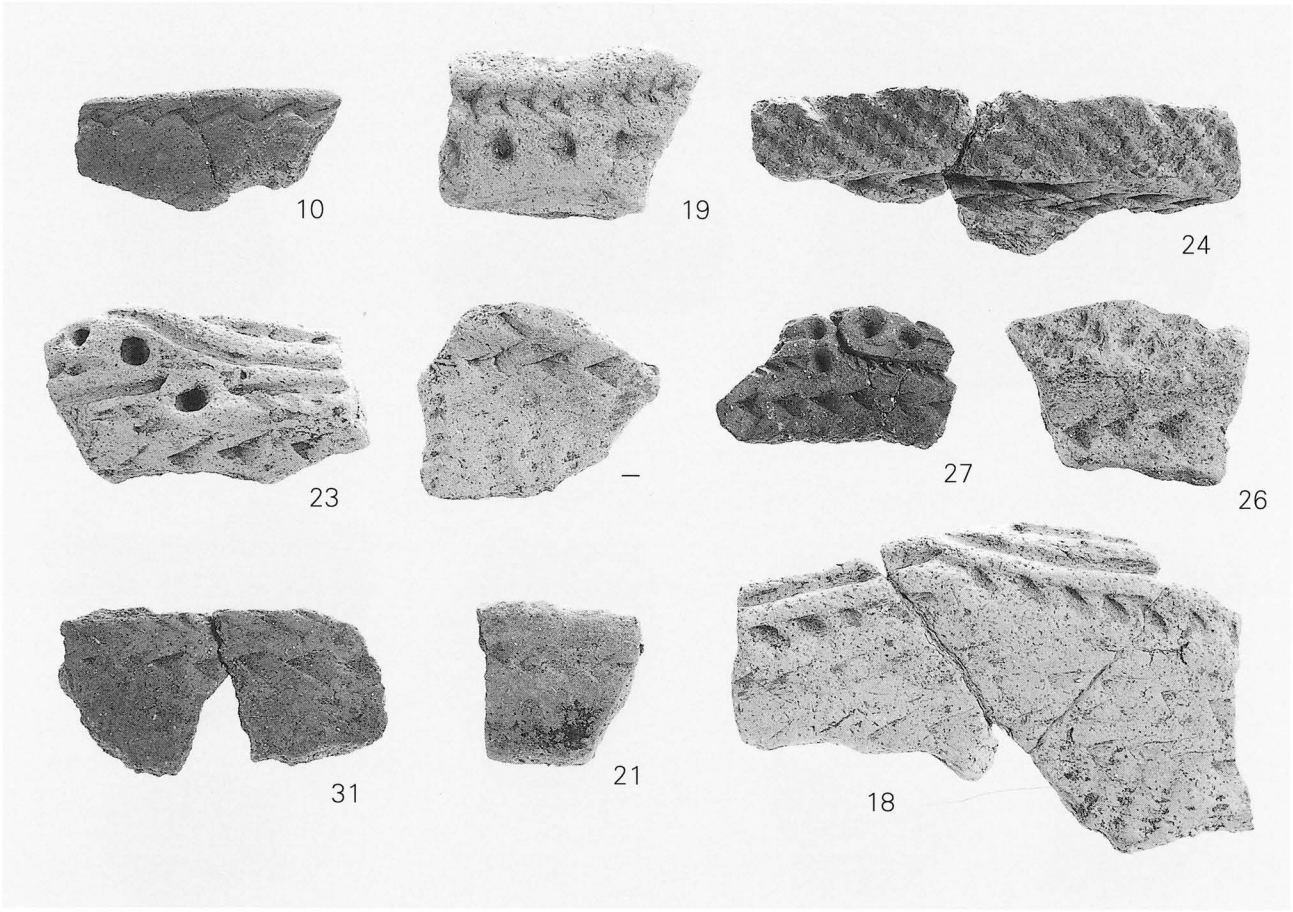
写真図版 1



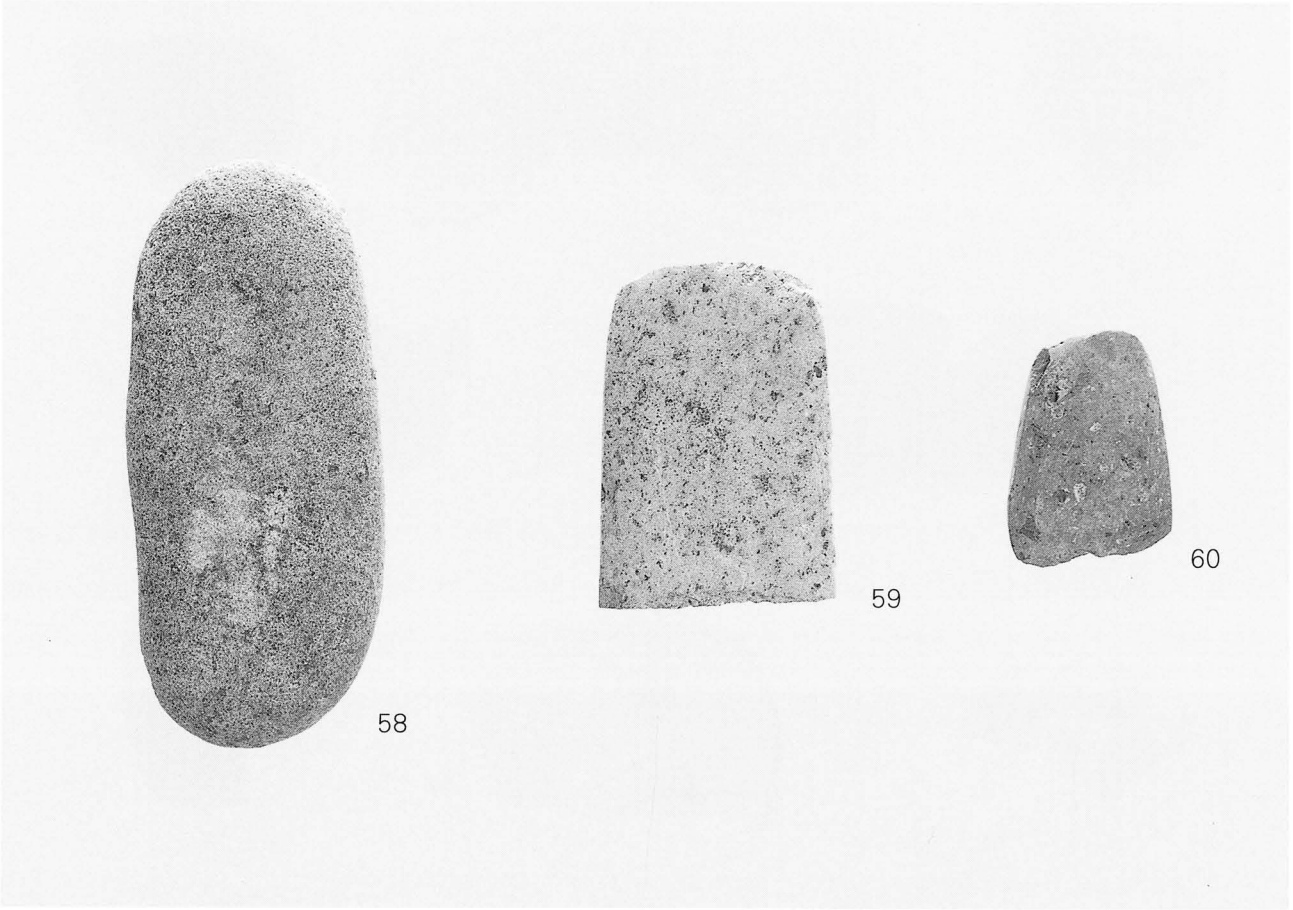
写真図版 2　出土遺物（1/2）　※すべて沢川ヌゲダ遺跡



写真図版３　出土遺物（1/2）　※TH－01遺跡：1・2、TH－04遺跡：56、沢川北遺跡：その他



写真図版４　気屋式土器三角形連続刺突文



写真図版５　石器（1/2）　※TH－02遺跡：60、沢川ヌゲダ遺跡：58・59

報告書抄録

ふりがな	ちゅうさんかんちいきそうごうせいびじぎょう「とやませいぶきゅうりょうちく」ほじょうせいびこうじにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく とやまけんふくおかまちそうごうちくにかかるまいぞうぶんかざいほうぞうちしくつちょうさほうこくしょ てぃえいち－ぜろいちいせき・てぃえいち－ぜろにいせき・そうごうぬげだいせき・てぃえいち－ぜろよんいせき・そうごうきたいせき
書　　名	中山間地域総合整備事業「とやま西部丘陵地区」圃場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 富山県福岡町沢川地区に係る埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告書 TH－01遺跡・TH－02遺跡・沢川ヌゲダ遺跡・TH－04遺跡・沢川北遺跡
シリーズ名	福岡町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	8
編著者名	栗山雅夫
編集・発行機関	福岡町教育委員会
所在地	〒939－0132　富山県西砺波郡福岡町大滝44番地　TEL 0766－64－5333
発行年月日	西暦2001年３月31日

ふりがな 所収遺跡	しょざいち 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
TH－01	ふくおかまちそうごう 福岡町沢川	16224	422092	36度 46分 25秒	136度 51分 35秒	19991004～ 19991026	244㎡	圃場整備事業に伴う分布調査・試掘調査
TH－02	ふくおかまちそうごう 福岡町沢川	16224	422093	36度 46分 30秒	136度 51分 40秒	19991004～ 19991026	20㎡	
そうごう 沢川ヌゲダ (旧TH－03)	ふくおかまちそうごう 福岡町沢川	16224	422094	36度 46分 20秒	136度 51分 50秒	19991004～ 19991026	372㎡	
TH－04	ふくおかまちそうごう 福岡町沢川	16224	422095	36度 46分 15秒	136度 51分 35秒	20000925～ 20001004・ 20001221～ 20001225	268㎡	
そうごうきた 沢川北	ふくおかまちそうごう 福岡町沢川	16224	422001	36度 46分 20秒	136度 51分 30秒	20000925～ 20001004・ 20001221～ 20001225	291㎡	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	遺物	特記事項
TH－01	散布地	縄文・中世・近世	なし	縄文石器、染付、越中瀬戸、近世陶磁器	遺跡抹消
TH－02	散布地	縄文・近世	なし	磨製石斧、近世陶器	遺跡抹消
沢川ヌゲダ	集落	縄文(中期・後期)	縄文中～後期：土坑、小穴、住居址？	縄文土器、石鏃、剥片、磨製石斧、凹石、円盤状土製品・近世陶磁器	旧TH－03遺跡
TH－04	散布地	中世・近世	なし	珠洲焼、染付、唐津、越中瀬戸、近世陶磁器	遺跡抹消
沢川北	集落	縄文(中期・後期)	縄文中～後期：土坑	縄文土器	範囲縮小

※遺物は、分布調査・試掘調査により採集・出土したものを記している。
　また、試掘調査により消滅した遺跡の場合、主な時代は採集遺物の時代を記している。

中山間地域総合整備事業「とやま西部丘陵地区」圃場整備工事
富山県福岡町

沢川地区に係る埋蔵文化財包蔵地
試掘調査報告書

TH－01遺跡・TH－02遺跡・沢川ヌゲダ遺跡・TH－04遺跡・沢川北遺跡

発　行　日　平成13年３月31日
編集・発行　福岡町教育委員会
富山県西砺波郡福岡町大滝44番地
TEL 0766－64－5333
印　　刷　株式会社チューエツ